

「Break Through」する音

名野隆夫 三洋電機セミコンダクターカンパニー/半導体シニア協会会員



人は「人との良き出会い」によって「変化」する。人は「変化」を繰り返しながら「成長」を続ける。人は「不可能に対して巨大なエネルギーを持って挑戦」して初めて人生の「BREAKTHROUGH」を起こすことができる。

私は78年からCADの仕事に20年間従事した。最初の10年間はあらゆる事に関心を持ち確実に技術分野を拡大した。しかしいくら分野を広げても同じレベルの勉強を繰り返していた私は何の「BREAKTHROUGH」も起こすことはできなかった。

88年、私は現SILVACO社長Dr. Ivan Pasicに出会った。今でこそ世界7か国に支店を持つベンチャービジネスの成功者である彼は、当時日本の小さな商社マンと2人で回路シミュレーション用「MOSFETモデル」パラメータ抽出の自作ソフトを売り歩いていた。ユゴー人の彼は米国でMBAとPh.D.を取得し“アメリカンドリーム”に向けて突っ走っていた。これからの回路設計には高度な「MOSFETモデル」が必要と、熱く説く彼に、私は初めて本物の「執念」と「情熱」を見た。

彼に影響された私は「MOSFETモデリング」に強い関心を持った。当時のカリフォルニア大学バークレー校には世界のトップレベルの学者が集まって「MOSFETモデリング」の研究を長年に渡って行っていた。デバイス技術者の友人は「コンピュータ技術者がMOSFETモデリングを独学するなんて不可能」と親切な忠告をくれた。私はバークレー校の研究報告会資料を米国の友人から送ってもらい、数年間かけて、全ての資料と関連論文を詳細に読み破し整理した。それまでの私にとって「MOSFETモデリング」はあまりにも難度が高過ぎた。いや本物の「執念」と「情熱」を持たない私には挑戦しても厚い壁を破れなかつたのだ。人は「執念」と「情熱」を持った時、神がかり的な能力を発揮できることを私は知った。

私の作成した「MOSFETモデリング」に関する資料を見たシルバコ・ジャパンの青山社長は、技術講演会を設定してくれた。その場には「MOSFETモデリング」に関心のある多くの大学教授、企業研究者が集まつた。講演が終った後に、青山社長から「名野さん次は博士号に挑戦です」と言われた。私は博士号がどのようにしたら得られるのか、さらに論文の書き方さえも知らなかつた。

幸いなことに群馬大学の小林教授から私は論文執筆支援の申し入れがあった。教授はあまりにもレベルの低い私に、根気良く論文の指導を続けてくれた。論文を書く度に自分が大きく成長し、確実に厚い壁を破っていく音を生まれて初めて聞いた。しかし博士号まであと一歩という時に、私は休憩室で田端部長（現常務執行役員）の雑談を耳にしてしまつた。「企業の博士は会社の収益に貢献しないと価値が無い」。確かに一理ある。私は「MOSFETモデリング」で博士号を取るのを止め、商品に直結するアナログLSIで博士号を取ると決意した。また新たな挑戦であるが、すでに本物の「執念」と「情熱」を身に付けた私は、自信を持って「厚い壁」に挑んだ。

02年「携帯機器用高電圧・大電流・高効率電源回路に関する研究」で博士号を取つた私は56歳であった。03年に「回路シミュレーションとMOSFETモデリング技術」をサイベック社から出版した。04年に「日経BP技術賞」を受賞した。

現在の私は博士論文テーマのビジネス化推進と共に、三洋電機「アナログ大学院」の講師として後輩の指導に、群馬大学で「産学連携大学院客員教授」として学生の指導に当つてゐる。私は多くの人に恩を受けた。私はその恩返しをしなくてはならない。

本稿は、半導体シニア協会（SSIS）の御協力により、SSISメンバーの方々に、リレーエッセイの形で、これまでのビジネスの様々な局面で遭つた難題に如何にトライしてブレークスルーブレーチャーしたかを御自身で「勇気」を持って語つていただくものです。